

会員紹介：萩原耕一さん

私の略歴



1950年東京の中目黒に生まれる。某大学を自主退学した後、渡米。カリフォルニア州立大学院、ジョージタウン大学院でそれぞれ人文地理学、社会人口学修士課程修了後、国際開発の道に進む。

1983~85年、ケニアの地方都市で2年間 JICA（国際協力事業団）の中小企業育成の専門家として勤務。

1985年に国連専門機関（UNIDO）に工業開発官として採用される。27年間在籍した国際連合工業開発機関（UNIDO）を2012年3月に定年退職。UNIDOでは主に途上国の産業開発支援を担当し、アフリカ20カ国に日本からの技術移

転や投資促進事業にユニークな成果を残す。2011年12月処女作「スピリチュアル系国連職員、吼える！～ざまあみやがれ、今日も生きている～」(たま出版)を発表。現在、全国各地で講演活動を精力的に行っている。47歳の時に不思議な体験を通じてスピリチュアルに目覚める。その結果、「闘う男」から「愉しむ男」に大変革を遂げ、ようやく人生のスタートラインに着く（それまでは助走だった）。2011年3月11日を契機に、執筆活動を開始。現在、国際連合に代わる新しい国際秩序設立を準備中。アフリカ協会特別研究員。桜美林大学非常勤講師。担当は「環境と経済」、日本メンタルヘルス協会心理カウンセリング基礎コース終了。NLP（神経言語プログラミング）プラクティショナー。

従事した仕事の内容

1981年から31年間国際協力の世界に身を置くことが出来ました。その内、海外での勤務は8年半と比較的短いものです。担当地域は7割がたアフリカでした。以下時系列的に紹介させていただきます。

海外コンサルティング企業協会（ECFA）（1981～1983）

一言で申せば、ECFAには拾われる形で雇っていただきました。当時 ECFA は初代専務理事山口仁秋氏の下、業界では国際機関や開発専門機関の登竜門として異色の存在でした。その山口氏との個人面接だけで採用されました。

仕事は主に「雑巾がけ」と呼ばれる新人職員が担当するものでした。会員企業のための調査資金を会員に代わり国庫補助金の申請をする仕事です。調査の中でも比較的大きなものを担当しましたが、補助率が1/2で企業負担がバカにならなかったこともあり、予算消化に大変苦勞しました。通産省（現経産省）技術協力課という部署に毎日通う日々が続きました。ワープロが出現する前で、すべて手書きの書類を何度も書き直させられた記憶があります。「てにをは」が一か所だけ担当官の「好み」にあわないという理由で事務所に持ち帰り書き直しをさせられた楽しい時代でした。この時に訓

練された書類作成や厳しい担当官への申請説明が後々の仕事に大変役立ったのは幸いでした。

当時はまだ城山三郎「官僚たちの夏」風の雰囲気漂う時代で、中央官庁の凄さとばかばかしさを同時に垣間見たのは、これまたとても良い経験でした。ECFA 職員として最初の海外出張はインドネシアとインドの国際開発コンサルティング企業の実態調査でした。単独調査でしたが、最初のジャカルタでは道に迷った挙句、やくざの悪巧みの現場に遭遇してしまい、這う這うの体で逃げまくったことがあります。インドのデリー郊外では蚊に刺されてしまい、帰国後しばらくして 41 度の高熱を 3 日間出し続けました。多分デング熱か 3 日マラリアだったのでしょうか。これ以後途上国への出張が何度も続きますが、殆ど毎回珍道中です。

実は、ECFA 事務局で仕事をしたのはわずか半年ほどです。私の元々の専門は「人口」と「人文地理」で国際開発専門家として不可欠な経済の知識が不足していました。そこで、事務局長の判断で国際開発センター（IDCJ）の「開発エコノミスト」コースに半年間参加することとなりました。ここでの経験、勉強が私のキャリアデヴェロップメントに大きく影響しています。

その直後、UNIDO 東京投資促進事務所（UNIDO IPS Tokyo）への出向を命じられ、ECFA から UNIDO への最初のインハウス・コンサルタントとなりました。最初の仕事は、事務所としては、初めての投資促進官招聘プログラムでした。セネガルの輸出加工区から男女 1 人ずつを 3 か月にわたりフルアテンドしました。今では事務所の「目玉」事業となっていますが、その時は初めてということで、事務所としての経験値はゼロ、当然マニュアルもありませんでした。闇雲に企業に連絡を取り、平身低頭訪問アポを取りまくり何とか 3 か月を乗り切りました。もっとも、具体的な投資や貿易案件に至ったものはほぼ皆無でした。

このセネガル・プログラムの間に、輸出加工区の総裁が訪日し、事務所主催の歓迎レセプションを催すこととなりました。

代表「こんなレセプションに人が集まってくれるかどうか、君の意見はどうかね？」

私「どうでしょうか、50 人も集めれば形にはなるかと・・・」

代表「それだけ集められるのか？結構難しいと思うが。時間も 1 週間しかないが、やってくれるか？」

私「とにかく、やってみましょう。」

今日のようにデータベースがありません。メールどころかファックスが導入される以前の事です。その日からとにかく「紳士名鑑」を頼りに思いつくまま選択し、電話をかけまくりました。「初めまして、私 UNIDO 東京事務所の萩原と申します。」「何ですの？そのユニドって？」メチャクチャに難しいセールストークです。同じことを何度も説明し、お願を繰り返しました。一日 200~300 本程もかけたでしょうか。中々「YES」をもらえません。さすがに 3 日目あたりには声がかすれてきました。努力の甲

斐あってか、当日は 80 名が参加してくれました。事務所代表はこの外喜んでくれました。実は、この出来事が後日私の UNIDO 本採用となった切っ掛けとなったことは間違いありません。

国際協力事業団（JICA）派遣専門家（1983～1985）

JICA 専門家としてのケニア行きはまさに「青天の霹靂」でした。全くの打診もなく ECFA 事務局長から突然のご下問でした。その 1 か月前には結婚式を挙げており、新婚生活をケニアで送るのも悪くないと直感的には思いました。結婚前にカミさんは途上国で生活する自信がないと言ってましたが、当分そのような話はないとはぐらかしていました。ケニア行きが決定した日、カミさんは絶句しました。

その時私は 33 歳で、JICA 専門家としては最若手でした。役職は「経済アドバイザー」。工業省傘下のケニア工業団地公社で中小企業促進事業が担当となりました。ナイロビから北に約 180 km に位置するニエリという町に大中小合わせて 30 程の建屋がある工業団地です。大と言っても 450m²程度ですからほとんどが零細企業のレベルです。

現地に赴任した時は、わずかにトイレット・ペーパーのローリング、食パン製造、木製洗濯ばさみ製造の各工場が極度の低稼働率に陥りながら動いていました。工業団地というよりはゴースト・タウンと呼んだ方が相応しい静寂ぶりでした。団地公社の支部長から「あなたの在職中にここが活気あふれる企業で一杯になることを期待しています。」と囁かれた時は、さすがに背筋がゾツとしたことを覚えています。

職場は、事務局の他に機械などの修繕工場に、JICA の無償による小さな鍛造工場と前述の 2 エーカーほどの工業団地で成り立っていました。事務局に 10 人、工場部門に 20 人足らずのこじんまりした構成でした。着任早々、公社全体に漂う無気力感を察知することとなりました。ホワイトカラー組とブルーカラー組の間に溝があり、結束らしいものを全く感じられませんでした。表面的には仲が良さそうに振舞ってはいても、実際にはどうだか分かりません。そのうちに仲間内の内緒話をご注進とばかりに持ってくるものも現れたりして、少しずつ実情を把握できるようになりました。曰く、工場の責任者は奥さんを 4 人も抱えて火の車状態で、そのうちに借金の申し込みに来るから覚悟しておいた方がよいとか、誰々は酒癖が悪く暴れることしばしばで気をつけるとか、支部長は仮病が多くあまりオフィスに現れない、などなど。どこの国にもゴシップ好きはいるものです。飽きることはありませんでした。

私の日々の生活はオポチュニティ・スタディに明け暮れていました。IDC で習った F/S の手法と UNIDO の F/S マニュアルに従って 2 年間に 50 近くの案件を手掛けました。財務計算を電卓でやっていたからさすがに時間がかかりました。ジーンズの縫製、金属製の門扉、木製椅子、メラミン樹脂、農機具、チョーク、ファスナー、家電修理、豆炭、バーソープ、パネルクロック、活性炭、ビスケット、皮下注射針、額縁などな

ど、色々と手掛けました。

経験不足がいたるところで露見してしまいましたが、離任時には入居率が 40%、その操業率が 80%まで上がってくれたことはありがたかったです。稚拙な最終報告書が残っていますが、2 年間のフラストレーション、本部に対する不満、組織の問題についてこれでもかと書かれています。若気の至りとは言え、よくここまで書いたものだとビックリしています。何はともあれ、新婚のカミさん（随分前の SRID 事務局長）ともども楽しい 2 年間で過ごさせていただきました。

国連工業開発機関東京事務所（UNIDO IPS Tokyo）（1985 ~1991）

ケニア工業団地公社から半年の契約延長の打診がありました。受けるつもりで手続きを進めていたところ、またしても ECFA 事務局長から突然のご下問により、UNIDO 東京事務所に正式採用と相成りました。今度は次長職で、工業開発官という肩書です。

小さいオフィスでしたので財務、人事を含め庶務全般を担当しました。当時の事務所代表は SRID 会員でもあった故斉藤光雄氏です。経験不足の私にすべて任せて頂くという豪気の持ち主でした。その後 UNIDO で 27 年間も仕事をさせて頂いたのも斉藤氏のお蔭です。私の大恩人です。

バブル真っ盛りも手伝って ODA 伸び率が前年比を大幅アップする時代が続きました。そこには、同時に進行した凄まじい円高のお蔭で ODA の実態が分かりにくくなりました。当時の官房長官安倍晋三さんが突如 ODA はすべからずドルベースが基調であると言い出したのをご記憶でしょうか？そのお蔭もあり、日本の ODA がアメリカを抜き世界一となりましたが、我が事務所の予算はドルベースでしたので、複雑な状況が発生致しました。

事業の中心はアジア向けの投資促進でした。潤沢とは言い難い予算の下、平均 3 か月の投資促進官招聘事業を中心にビジネス・セミナーやワークショップを頻繁に繰り返しました。中国、フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシア、インド、スリランカを対象とした投資促進プログラムでした。殆どの招聘官が当該官庁や商工会議所、投資庁から送り込まれてきました。オリエンテーションではほぼ全員が完璧な「投資促進学」を披露してくれました。果たして海千山千の日本の企業人とどう渡り合うのか興味津津でした。いざ本番で私がお約束通り訪問に至る経緯を説明し、本人にボタンタッチしました。すると中には伝統の日本商人よろしく「揉み手」で「商談」を始める強者がいる一方、いきなり金縛り状態に突入する者までいました。それでもプログラムが終わるころには日本の商習慣にも精通し、たくましい投資促進官に変身してくれました。

我が事務所は、いわゆる仲人役ですので企業間で事業が成立する頃には存在感が薄れてしまうのは仕方のないことです。殆ど知られていませんが、中国や東南アジアで今

も操業を続けている日本との合弁企業のいくつかは我が事務所が先鞭をつけたものです。そんな生活が6年も続いたころこれまた突然本部行きの話が持ち上がりました。

国連工業開発機関本部 (UNIDO) (1991~1998)

UNIDO 本部で仕事をする事は希望していませんでした。ウィーンの街があまり好きになれなかったこともあり、一度も本部に行きたいと思っただけではありませんでした。にもかかわらず、またまたどこからともなくその話が舞い降りてきました。敢えて断る理由がなかったので、ありがたく受け入れました。

途上国問題は、幼児時代に直面した「格差」を通じて随分前から意識の中にありました。そういう意味では、国連で働くことになったのも極めて自然な事かもしれません。ところが、果たして途上国問題に関わる仕事が私にとって適職かどうか問われると、どうしてもイエスと答えられないのです。国連職員として、基本的能力である語学力や技術力にどうしても引け目を感じてしまうからです。



恥ずかしながら、わが語学力は国連職員としては目を覆うものがありました。1対1のやり取りであれば、「メラビアンの法則」を駆使し、たとえ相手がどこかの国の工業大臣でも臆することはありませんでしたが、全体会議などでは発言を躊躇することしばしばでした。国際機関の会議は、さしずめ己の語学能力やプレゼン能力の披露の場と化します。特に

口達者なインド系職員の発言を止める

UNIDO 本部執務室にて

のは大変です。対照的に日本人はおとなしいことで知られています。そんな私でも、最終的には黙っていることができず、手を挙げてしまうので、会議では「恥じ掻き」の連続でした。今日に至るもプレゼンテーション下手は克服できません。

UNIDO 本部では当初 Feasibility Study Branch に所属しました。ご記憶かも知れませんが、UNIDO はかつて F/S 手法を巡って OECD と雌雄を争っていたことがあります。UNIDO が開発した COMFAR (Computer Model for Feasibility Analysis and Reporting) は今日では世界各地で活用されており、その基本マニュアル Manual for the Industrial Feasibility Study は国連書籍としては他の追従を許さないベストセラーとなっています。

残念ながら私が Branch に加わった頃は財政逼迫の煽りもあってか、UNIDO の手による F/S の数が思いの外少なくなっていました。しかも、調査と投資が連動しているシステムに欠けていて、いわゆる調査のための調査が支配的でもありました。着任直後は

たっぷりと時間もありませんでしたので、過去5年ほどのF/S報告書を読みまくりました。想像通り、そのほとんどが、財務分析的に viable であり、技術的に feasible という結果を導いていました。私なりにその追跡調査を試みましたが、どの調査をとっても実際の implementation に結び付いた痕跡がありません。先輩諸氏に尋ねると、異口同音にそれは UNIDO の仕事の範囲外であるという意外な回答を得ました。どうやらしてはいけない質問だったようです。

それから2年後には組織全体のリストラが始まり UNIDO の暗黒時代に突入しました。F/S Branch は解体され私は投資促進部に配置換えとなりました。財政難は続き、専門職員の勤務評価が資金調達能力で測られるはめとなりました。私の場合は幸いにも日本政府の信託基金という拠りどころがあったお蔭でしばらくは部内の「売り上げ」NO.1 のポジションを維持できました。今でも思い出深いプロジェクトとして SEPIA (Senior Expert Programme in Africa) があります。文字通り日本のシニア専門家制度をアフリカに根付かせようとする試みです。1997年10月にシニア専門家2名と共にザンビア、ジンバブウェ、マラウイ、タンザニア、ケニアで調査を実施し、その結果大豆食品の普及をテーマに絞込んだプログラムとして発展しています。現在もケニアを中心にソマリアからの難民の栄養状況改善プロジェクトとして豆乳やきな粉製造が続いています。

その間も UNIDO のリストラは続き、着任当初には1,300人いた職員があつという間に半分に減りました。更には1996年にはアメリカが脱退することとなり、日本は分担金の絶対額不変のまま、ダントツのトップドナーに躍り上がることとなりました。元々私はウィーンに骨をうずめる気持ちは更々なかったので、6年半を過ぎたころに、恐らく邦人職員としては初の早期退職を希望しました。人事課長はまさかトップドナー国の職員が手を挙げることは思っていなかったらしく、困惑していました。所定の手続きに思わぬほど時間がかかりましたが、1998年2月日本に戻ってまいりました。

国連工業開発機関東京事務所 (UNIDO ITPO Tokyo) (1998 03~2012 03)

結局いろいろと迷いましたが、当時の代表の勧めもあって元の職場に復帰することとなりました。今度の役職は National Expert というもので、煩わしい雑務から解放されてプロジェクトに専念できそうなポストでした。私の不在中に事務所が IPS (Investment promotion Service) から ITPO (Investment and Technology Promotion Office) に様変わりしていました。それまでの投資促進オンリーから技術移転が加わり守備範囲が広がったということです。

1993年から TICAD (アフリカ開発会議) が始まったこともあり、アジア中心からアフリカ向けプロジェクトが急増することを見込んで、私もサブサハラを担当することとなりました。残念ながら私が担当した期間 (2000年~2012年) はまだ日本企業がアフリカに食指を動かす気運がありませんでした。その間にお隣の中国が国を挙げての大攻勢をかけ、今やアフリカ大陸のどこに行っても中国ビジネスが席卷しています。日

本の「失われた 20 年」の間にアフリカには 100 万人以上の中国人が住み着くこととなり、既に中国の文化変容が起こってしまいました。

日本の対アフリカの投資部門、貿易部門では中国の圧倒的な存在感に恐れおののき、ただただ指をくわえているだけの状況が続きました。そのような環境下、我が事務所のアフリカにおける投資促進活動で誇るべき成果はわずかなものでした。

他方、技術移転事業には注目に値するプロジェクトがいくつかありました。その中でもバナナの廃材（茎）を原料とした紙、布を作るプロジェクトが一番思い出深いものです。主に東アフリカ（ケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ）を中心に多摩美術大学や名古屋市立大学が開発した技術の移転がテーマでした。2008 年 6 月の TICAD IV では理想的な技術の紹介に至り、その年の 10 月には当該大統領府の要請に従いルワンダとウガンダでバナナテキスタイルのセミナーとワークショップを実施しました。

図らずもウガンダでは大統領専用ヘリによる出迎え付きでムセベニ大統領への拝謁という栄誉も頂きました。私の UNIDO 定年後もこのプログラムが脈々と引き継がれていることは嬉しいことです。



バナナ以外にも小水力発電、太陽光発電、風力発電、バイオディーゼル、食品加工、木材加工、金属加工などの分野を多岐にわたって手掛けましたが、なかなか形ある成果に結びつくことがありませんでした。UNIDO 東京事務所での最後の 10 年ほどは毎日がフラストレーションの連続でしたが、愉しくも充実した日々でした。

2011 年 4 月 12 日。東日本大震災の一

軍用ヘリでお出迎え～ウガンダ～

月後に気仙沼と南三陸町の被災現場

を訪れることとなりました。南三陸町の防災センター前で一時間の内観タイムとなりました。これからの人生の目的は？この被災地復興のため自分はどう向き合うのか？アフリカをどうするのか？1 年後の定年退職が決まっていたから、これから残りの人生について自問自答が続きました。この時の経験が現在の「立ち位置」の原点であったように思います。

仕事上の苦勞と喜び

毎日が異文化間コミュニケーションで飽きることのない仕事に長年携われたことは幸せなことでした。嫌なことや辛かったことを全く思い出せません。いつも愉しく仕事をしていたと思います。確かに衝突のようなものはあって、辞表は 4 回、進退伺いは 2 回提出しましたが、いずれも受理されることがなかったのは幸いでした。

国連職員として致命的な弱点がありました。それは技術について専門性を持っていないことでした。国連の中で私のようなものは、ジェネラリストと呼ばれています。いわゆる文系の「何でも屋」です。あまりに役に立ちません。国連職員は大きく分けて二つに分けられます。一つは、たまたま好きで勉強してきたものが途上国問題に貢献できるとどこかで気が付いた者。技術力で勝負できるクールな集団です。もう一つは、どこかで途上国問題に関し大きなモチベーションを受け国連職員を目指した者。勢いで勝負するホットな集団です。国連ではうだつが上がらないグループに属します。私は一生懸命に国連を目指したことはありませんが、分類的には後者に属します。従って国連内の出世競争とは完全に無縁でした。

他には何もありませんが、私は途上国問題に関し、揺るぎのないモチベーションを持っていると信じています。なにしろその源は幼児体験ですから。でもモチベーションだけが売り物の国連職員では困ります。経済開発とか工業開発とかの分野は正直に言うとな私の得意分野とは思われませんが、好きな世界に身を投じたのは間違いありませんが、苦手な種目にエントリーしてしまったような気もしています。私の口八丁手八丁振りからはむしろ営業畑に向いていて、一匹狼の商社マンとして大成したかも知れないと思うことしばしばです。生憎と群れることを良しとしない性格でしたので、普通のサラリーマンのようにチームワークを求められる仕事には全く向かないかもしれません。

私は生まれつき、人の痛みや苦しみを見過ごすことができません。中でも、弱い者いじめが特に許せないのです。私の行為は時として「お節介」な行動に発展してしまいます。国連などは、さしずめ「開発援助」という錦の御旗を掲げ徒党を組んで、とんでもない「お節介」を焼いている組織なのかもしれません。そもそも「援助」などという言葉自体が上からの目線の、いかにも助けてやってあげる、みたいな嫌らしい響きがあります。しかし、たとえお節介と言われようが、途上国の辛い現状をほんの少しでも改善する手助けをさせていただけるのであれば、私にとってそれ以上の喜びはありません。

私の生き方

結局、人は「生きているだけで大もうけ」「生きているだけで幸せ」というのが私の結論です。その理由や存在意義に関わらず、とにかく生きているということがすべてです。この世に不必要な生き物などいるはずもないわけですから。取りあえず、何気なく、さり気なく、できれば爽やかにそこにほんわかと「在る」ことが肝要です。

私は来年 65 歳になります。首尾よく平均寿命を生きられたとするとあと精々15 年ほどでしょうか。15 年はあっという間です。神戸大震災からすでに 20 年経ちました。そんな短い限りある時間を、どのように過ごせたら豊かなものになるのでしょうか。

やっぱり「愉しむ」ことが一番ではないでしょうか。人間関係にありがちな恨み、妬

み、嫉み、辛みなどに費やしている時間は無駄という他ありません。私にとってそれらの感情に支配されることは愉しくないからです。確かに一見否定的と思われる個々人の思いが人類の発展に大いに寄与してきたことは否めませんが、もはやそういう時代はとっくの昔に終わっているのです。真の平和な世の中はこれらの感情からは導かれないということを人類自身が実証済みのはずです。

何年か前に『余命 1 年・・・だとしたら』という本に感化されて、仮想「余命 1 年」をしばらく続けてみました。勝手な想定ですので確かに緊迫感には欠けていましたが、とても考えさせられる日々でした。死ぬ前に一番したいことをするとか、やり残したことを完成するとか、思いはさまざまに錯綜しましたが、結局は今まさにしようとしているこの息が最後のものと思え、というのが命題となりました。つまり「今」、「ここ」の世界に生きることが残ったわけです。

「今」(now) も「ここ」(here) も英語では present に置き換えられます。そう、プレゼント(贈り物)です。人間は生きている限りこのプレゼントを宇宙から絶え間なく贈られ続けているのです。まさに「生きてるだけで大もうけ」なのです。